２　桂川・相模川流域協議会　流域シンポジウム

（報告者：山梨県富士・東部林務環境事務所環境課）

（１）趣　旨

世界文化遺産登録された「富士山」を源とする命の水が、山中湖から桂川から相模川を経て、神奈川県民の飲み水になっている。そこで、世界文化遺産の構成資産である“源流の山中湖”で、森・里・海への水の循環と、環境保全の取り組みや最上流部の暮らしと文化についてかたるシンポジウムを、山中湖村との共催で開催しました。

（２）アクシデントと今回の特徴

開催予定の数日前から本州の南の海上を進む台風 27 号の影響から、バス送迎の一般参加を中止とし、プログラムの一部を変更して開催することに決定した。当日は、講師の先生方のご理解と関係者の協力の中、一部地元の参加者も迎えて、無事開催することができた。

また今回は、シンポジウムの模様を、インターネットを通じて同時中継し、会場に来られない方やできるだけ多くの方々と共に学ぶ試みに挑戦した。

シンポジウムの全内容は、流域協議会のホームページに動画記録としてＵＰされている。

（３）概　要

○日　時　2013 年 10 月 26 日（土）

○場　所　山中湖村公民館

○テーマ　「富士山から相模湾へ水は巡る」

～紅葉の山中湖シンポジウム～

○内　容

◆開会のあいさつ（河西代表幹事）

・台風の接近ということで安全を第一に考え、バスによる一般参加を中止した。

・当協議会の運営には、会員、事業者からの会費と行政から負担金として貴重な税金が入っているため、背景には大勢の流域住民がいることを考え、シンポジウムを同時中継して多くの方に視聴していただくことにした

・今回のシンポジウムは、もう一度原点に返り、源流域から流域全体の環境保全と再生を考えることを核としたい。

◆高村文教山中湖村長からのメッセージ

当初講演を予定していたが、台風への防災対応のため欠席となり、村長からのメッセージを担当課長により代読された。

（内容）流域協議会の日頃の活動に敬意と感謝を表するとともに、自立したまちづくりの主要政策として、村内一斉清掃活動をはじめ湖の水質保全や水辺の希少生物保護保全に取り組んでいる。世界遺産登録を機にそれらを慈しみ、護り、麗しい郷里を築こうと官民一体となって進めていきたい。

◆第一部　**基調講演**　「森里海の循環型社会」

講　　師　安田喜憲氏（国際日本文化研究センター名誉教授）

我々は、2011 年 3 月 11 日の東北大震災により、これまでの生き方に対し根本的転換を迫られている。日本人は、上流・中流・下流の人々が、命の水の循環で繋がっているという世界観を持ち、それを千年も万年も守ってきた。

「富士山」の世界文化遺産登録を通じて、世界の人々から「森里海の命の水の循環」という世界観が認められた。今こそ森里海の水の循環系を守ることが、何よりも大切である。

◆第二部　**パネルディスカッション**

下流域の人々は、上流域の人々の生活や文化を理解し、魅力的な源流域づくりへの協力と相互交流の必要性についてディスカッションを行った。

〇コーディネーター

・樋口重喜（桂川・相模川流域協議会　幹事）

〇パ ネ リ ス ト

・安田喜憲（国際日本文化研究センター名誉教授）

・坂本任邦（山中諏訪神社・山中浅間神社　宮司）

山中湖村内の神社仏閣の位置や祭礼を紹介していただき、自然へ感謝して暮らす源流域住民の日常の姿を知ることができた。

・吉野　勝（グリーンリバース　代表）

流域の木材等を活用した産業の活性をとおし、流域の経済的循環の重要性と環境保全へのさらなる可能性について、木材建築の伝統工法や具体的事例を紹介していただいた。

・金清典広（高野ランドスケーププランニング(株)　代表取締役）

源流すなわち水源域の景観保全や街づくりについて、住民の希望と自然の役割をどう調和させるか、活動拠点の北海道や海外での実績や事例から学ぶことができた。

◆質疑応答

会場から活発な質問や感想が述べられた。また、安田先生が「森里海の循環文明」として「京都モデル」を提唱されているが、今回を機に「富士山モデル」の構築について要請があり、安田先生も前向きな答弁をされた。源流域の地域協議会の立ち上げについても話題となった。

◆「富士山・山中湖宣言」の採択

最後に、「富士山・山中湖宣言」が採択された。

閉会のあいさつ（倉橋代表幹事）

富士山・山中湖宣言

「清く豊かに水は巡る。」

ひとたび川のほとりに立てば、県境も市町村の境も存在しない。

桂川･相模川の水は、地域住民はもとより、神奈川県民９００万人の飲み水の６割をまかなう、かけがえのない水であり続けている。

源流に暮らす人々は、桂川の水が下流に暮らす人々の飲み水になっていることを自覚し、少しでも水を汚さないよう、その責任を果たしたい。

下流に暮らす人々は、水を使う時には、源流に暮らす人々の生活と水への気遣いを思い、感謝の気持ちを持って大切に水を使いたい。

世界文化遺産である富士山から流れ出る桂川･相模川の流域環境を、子や孫に誇れるように、私達の手で少しでも良くするため、それぞれができることを、今日この日から始めよう。

２０１３年（平成２５年）１０月２６日　桂川・相模川流域協機会

山　　中　　湖　　村

2013 年度　桂川・相模川流域協議会　流域シンポジウム

基調講演　「森里海への循環型社会」

安田喜憲　国際日本文化研究センター名誉教授

桂川･相模川流域協議会での講演は、2003 年以来となります。それから 10 年が経過し、国際日本文化センターも定年退職しましたが、この 10 年間に世の中の動きが変わってまいりました。

それは、水源税や森林環境税というものが立法化され、多くの金が水源林や流域に投下されるようになってきたと思っていたが、流域協議会の河西さんとの話で、「必ずしもそうではない。水源税や森林環境税などでお金はたくさん入ってくるけれど、それは必ずしも自分達のところにはきていない。」と言っておられました。この 10 年間に、日本の世の中の方針が、「流域を守る」「水の循環系を守る」という命の水の循環系を守ることが、自分達の子供や孫にとって最も重要であるということをわからない人が増えてきた。これは大変悲しむことです。

実は、宮城県知事は、3/11 の巨大な津波により「津波は恐い」と皆が言っているときに、「今度のような津波に抵抗出来

るような巨大な防潮提を造らなければな

らない」ということで、「堤防を造るお金をくれ」と言って、何兆円ものお金を取ってきた。お金を取ってきた当時は、みんな津波は恐いので、「15mでも低い、20mの堤防をつくれ」と言った。そして「知事は素晴らしい。復興に熱心だ。」という評価を得た。

その災害から2年がたった頃、海岸部の人達が、「そんなものいらん」「そんな大きな堤防造って海が見えなければ、津波がきてもわからなくなる。そのままの自然の美しい風景の方が、よっぽどありがたい。」と言い出してきた。

ところで今考えると、知事は何とかしたいということであったかもしれなかったが、それは非常に誤った選択だった。先ず知事としなければならなかったことは、真っ先に被災した住民の生活をどう立て直すかということを優先することだったはずです。ところが、30年先、50年先にくるかどうか分らないような巨大な津波に抵抗するような高さ15m、幅150mの巨大な堤防を、宮城県全域 160ｋｍに渡って造ろうとした。私は、その話を聞いた時、驚きとともに、「これでは森里海の水の循環系を破壊する」と思った。軟弱地盤の上に、高さ15m、底辺幅150mの巨大なものを造れば地盤沈下が起こるため、指示杭が必要となる。その支持杭を沖積世層まで打ち込まなければならず、それが地下水の循環を破壊するわけです。宮城県の海がなぜ豊かというと、森の栄養分が川ばかりでなく、地下水によって運ばれ、海に流れています。今堤防を造ったとしても、それは直ぐには影響は出てこない。

実は1993年、奥尻島で大きな地震があり、海岸に高さ11mの堤防を造った。それから5〜6年は何の影響もなかったが、しかし、地震から20年経った2013年、海が白灰現象により、全部死んでしまった。長い時間経たないとわからないのです。

このことは、「森里海の水の循環を守ることがいかに大切か」を知っている皆さんには理解できると思いますが、今の行政はそういう方向には行っていない。

ところで、宮城県県会議員は、知事が自分達の頭越しにやったことで、全員で「森の防潮を守る協議会」をつくった。会長は自民党県議員です。私と以前から活動を続けていた自民党県会議員が、知事が選挙に立ったら、真っ先に応援していた。「県会議員で全員反対しているリーダーが知事を応援したら、いままでやってきたことが水の泡になってしまう。」と言ったら、その議員は、知事の経済復興が9割方成功しているから、「堤防の問題は末節の問題だからほっといてもいい。」と言った。それを聞いて、私は話が逆転しているのではないかと思った。これからは、未来の子供達に美しく豊かな自然を残すため、森の防潮堤により森里海の水の循環系を守ることが、我々の責務であり、目の前の成長に憑かれて選挙し、またそれを支援することは、本当に間違っている。まさに、世の中は、「お金儲け」という方向に向いています。それはどうしてかというと、私は復興庁の復興推進委員に、「堤防を造るのはけしからん」と言ったところ、その時は「そのとおり宮城県の宝は海です。自然です。豊かな自

然と海を守ることが宮城県民の使命です。」と言っていた。しかし、復興庁の会議では、宮城県知事、福島県知事、岩手県知事も出席しているなかで、委員からは堤防の問題を含めて、「日本はこうあるべきだ」というような意見を言う人は一人もいなかった。

ところで、国土強靭化法が通り、コンクリートの専門家である京都大学助教授が一生懸命やっているが、いくらコンクリートの防潮堤を造ったって国土強靭化はできない。では、どうしたらいいか。それには、森里海の水の循環系を守っていくしかない。我々は、上流・中流・下流の人々が、命の水の循環で繋がっているという世界観を持ち、それを千年も万年も守ってきた。それにより、国土の 70% が森で覆われ、こんな美しく生物の多様性に溢れた国土を維持し、暮らすことができている。ところが、今までの科学は、どうやって自然を利用したらいい、どうやって自然を支配して人間の王国を作っていくかということに立脚した近代ヨーロッパの物質エネルギー文明により、物質とエネルギー、それに猛るためには、どうしたらいいのかということばかりを考えてきた。その中で、毎日美しい富士山を見て暮らすということが、そこに暮らす人々の心にどんな影響を与えるかを研究した科学はなかったが、最近は行われるようになってきた。

ところで、私は学生時代から、「森が大事だ」と言ってきた。1970 年代の初め「森が大事だ、緑が大事だというのなら、壁を緑色に塗っておけばいいじゃないか」と工学部の先生が言った。でも、森の緑と壁の緑とは違います。そこには命というものがあります。今まで我々は、物質エネルギーの物質的な豊かさを求めることばかりやってきて、その背後にあった命という大事なものを、長い間無視してきた。今、「森里海の水の循環系を守っていくしかない」ということを言っているのですが、残念ながら、世の中の人は、これが常識じゃなくて非常識なのです。

いままで私は、宮城県の人達はいいなと思っていたのですが、宮城県の人がこんなにもののわからない人だと思わなかった。気仙沼の海岸縁の漁民の皆が、「堤防は造るな、造らないでとくれ」言っている。ところが、内陸の仙台市の人達は、そのことを全く知らない。堤防があるかないかはどうでもいい。津波がくるなら、それに抵抗する大きな堤防を造ればいいじゃないかという考えです。

ところで、私は気仙沼によく海水浴に行きました。その海岸はビーチ幅 50m しかなく、高さ 15m、幅 150m の堤防を造ったら、そのビーチは全部隠れてしまう。ビーチというのは生物の多様性が最も高いところで、人工的に造ろうといっても、なかなか造れない。それを全部大きな堤防で埋め尽くす。そんな暴挙は人間の横暴のなにものでない。

県議会議員 59 名全員反対しているが、それは格好だけです。いざ選挙になったら、その人を応援している。私が「おかしいじゃないか」と言ったら、「堤防は末節の問題だ。」と言った。それはおかしい。堤防の問題は末節の問題だ。一番大切なのは復興です。経済成長です。これはうまくやっています。」という。確かにそう

です。いろいろな企業を誘致したりしています。例えば、漁業について、宮城県は漁業県で小さな漁港がたくさんあった。漁民がポンポン船に乗って、資源を取り尽くさないような循環的な海の利用をやっていた。ところが、「そんなことはおかしい。そんな非効率な漁業をするのはけしからん。」と言って、知事は漁特区というものを設けた。小さな漁港を全部つぶして、大きな漁港一本にして、そこに特区を設けた。特区を設けるということは、これは外資がはいれるということです。そこで中国の資本がどっと入ってきて、そして取り尽くすだけ取り尽くして、「はい、さよならです。」いま、宮城の三陸の海に中国の資本が参入してきたら、日本は終わりです。彼は松下政経塾の人で、彼は市場原理のハウツーしか教えない。日本の美しい自然を守るという思想や哲学は一切教えない。どうやれば金が儲かるのかを教えている。それにのっとった人達が日本のリーダーになって一生懸命やっている。それは、全く悪いとは言わない。日本の経済成長もやらなければいけない。しかしその影で、美しい日本の風土を守りながら千年も万年も生き続けるためには、皆さんがやっておられるような森里海の水の循環系を守るような運動が日本の常識にならなければいけない。

私が、国際日本文化センターを退職するとき、同僚だった川勝平太が静岡県知事になり、「やめたら世界文化遺産の仕事を手伝ってくれ」と言われた。それで富士山を世界遺産にする委員に選ばれ、私は副委員長になっている。

ところで、世界遺産にするために山梨県と静岡県の歩調を合わせるは難しかった。静岡の人は人がいいから、「世界遺産にしましょう」ということで、すぐ印を押した。山梨県はいろいろな組合があり、特に五湖では、ボートがあり、みんな反対するわけです。「世界遺産になると規制が厳しくなって観光客が減る。ボートの繋留が駄目になる。規制がかけられ撤廃するかもしれない。」ということでなかなか印をおしてくれない。締切り１週間前になっても印を押さなかったが、締切り一日前に全部の印が集まり、世界遺産登録した。

4/30 にイコモスが来て、「富士山を世界遺産に推薦します。ただし、三保の松原を除外すること。何故、三保の松原を除外するのか。確かに富士山の周辺には、富士山を崇拝するピグリームルートがある。それは世界遺産として認めましょう。しかし三保の松原は、そのルートから 45km も離れている。どうして、こんなものを世界遺産にできるのか。」と言って、「これを外さないと富士山を世界遺産に推薦しない。」と書いてあった。これを読んだ瞬間、これは西洋と東洋の戦いだと思った。我々はどうして「三保の松原」を崇拝するかというと、天女は富士山の化身です。その富士山の化身である天女が「美保の松原」にやってきて、水遊びして、また山に帰るのです。富士山と三保の松原は命の水の循環で繋がっている。富士山に降った雪が地下に染みこんで 10 年位して、柿田川とか駿河湾に溢れてくる。富士山の頂上と駿河湾の海底とは 8000ｍの落差があり、もの凄い急勾配の中で、我々は住んでいる。その富士山頂

と駿河湾の間は、命や生物の多様性に溢れている。

ところで、イコモスの最終決定会議が6月にカンボジアで行なわれることとなった。そこで議長を務めるのがソク・ワン副首相だった。私はカンボジアの調査を長くやっており、お願いの手紙を書かなければいけないと思い、いろいろ考えた結果、「これはアンコールワットだな」と決めた。アンコールワットは世界遺産になっているのが、その隣にアンコールトムがあって、そこには王様が住んでいる。12世紀では、世界一人口の大きな都市だった。でも、アンコールワットがどうしてシュリムアップ、トンレサップ湖北側の湖岸に造られたかいうと、アンコールワットの東側にプノンバケンという山がある。アンコールワットは山のシンボルとして造られたものである。カンボジアの人達は、今でも山を崇拝する。たとえば、アンコールトムに住んでいた王様は、必ず年に一回プノンバケン山に巡礼に行った。これにより、アンコールトムとプノンバケン山は水で繋がっている。アンコールトムやアンコールワットの周辺にある涵養を分析をしたところ、その水は呑めるくらいきれいで、その水がプノンバケン山から流れてきて、アンコールワット、アンコールトムを潤し、海に流れて行った。命の水の循環がきちんと維持されており、その世界観があるから山を崇拝している。私たちがどうして富士山を崇拝するかというと、それは命の水の循環を崇拝しているのです。だから、山梨の人も、静岡の人も、富士山を崇拝する。その背後には命の水の循環がある。

つまり、「アンコールワットとプノンバケン山の関係は、富士山と三保の松原と同じ関係だから、これを世界遺産にしてください。これは西洋と東洋の戦いだ。」そう手紙を書きました。どうしてかというと、西洋の人々は森里海の循環というものが分らない。彼らは畑作牧畜民で、畑を耕しますが、畑は降ってくる雨に基づいて麦を作るわけです。残りは牧草地にして、羊や山羊を放牧する。水の流れというものはあまり関係ない。しかもヨーロッパというのは大きな川、たとえばライン川のように色々な国をまたがっている。その国の上流から下流までを、一つの水の循環でやるということはできない。ヨーロッパでは川は水運としては大事だけれど、水によって人と人が繋がっているという世界観を持つことはできない。彼らにとって、「なぜ、富士山と三保の松原が水の循環で繋がっているのか分らない。しかも45ｋｍも離れている。それはおかしい。」という。私は、「この世界をヨーロッパ人に分らせるのは、あなた達が頑張らなければいけない。実は最終のユネスコの会議は、議長が大きな力を持っている。議長が黒を白に変えることができる。だからあなたが頑張ればいい。」と書いた。

6月22日に会議が始まり、「富士山」は2時半から審査が始まることになって、会場は1500人位いた。各国ユネスコ大使が10人位のお付きとともに来ており、その関係者もいた。やがて会議が始まったが、その途端に、場の雰囲気が変わった。それは富士山の力だと思った。まず、ドイツ大使から始まり、「富士山はすばらし

い」と言った。メキシコも同じだった。特に、マレーシアの女性大使が泣きながら言ったのには一番感動しました。次のインド大使はヒンズー教徒で、「水の循環を崇拝する世界、そのスピーチュアルな世界が重要だ」と言った。それにより全員が OK になった。ところが、ユネスコで大きな力を持っているフランスは、「富士山はすばらしい」と言ったが、「三保の松原」については一切言及しなかった。そして、世界遺産登録が承認された。そして帰ってきて、みんなで祝賀会やっている時、静岡県の課長が「こんな話もあります。」と教えてくれた。それは、エミール・ジュクラシスというフランス人ダンサーがいたが、彼女は日本の羽衣伝説の能に惚れ込んで、能の羽衣の舞を 1935 年からフランスで何回か公演を行い、また第２次世界大戦中にも公演し、それで絶賛を博した。そして「１度でもいいから羽衣の町に行ってみたい」と言っていたのですが、30 何歳かで亡くなってしまった。あまりにも奥さんの思い強かったので、1952 年にご主人がその遺髪を持って、美保の松原に来て、埋めた。それを聞いた清水町の町民が、みんなでお金を出し合い、記念碑を建てた。ところがその記念碑は汚らしい茶屋の隣にあったのですが、それをイコモスの人が、「この茶屋は何だ」と言い、静岡県庁の人はどぎまぎしてしまって、そのことを言えなかった。そのことを言っておけば、今回のことは起こらなかった。イコモスの人は案内した県庁の人に、「この茶店は汚い」「テトラポットとはなんだ」と言うのです。でも 4/30 に落ちたことで、連休中に 3000 人が「美保の松原」に集まった。そして、みんなでゴミ拾いをした。ここは遠藤さんという旅館の女将さんが一生懸命保全をやっていたのです。

これは、東洋の森里海という命の水の循環を守るという世界観を西洋が初めて認めた。山を崇拝する世界観、それは水の循環を崇拝するということです。それを西洋の人たちが認めた。もっと驚いたのは、文化庁は、「富士山」の副題に「信仰の対象と芸術の源泉」という副題をつけた。しかし、「信仰の対象というと、ヨーロッパ人はノーというのではないか」「一神教の国から否定されるのではないか」ということで、副題を取り、「富士山」だけ出した。ところが会場からやっぱりタイトルとして「信仰の対象と芸術の源泉」を復活させるべきだと言われた。世界の人々は山を崇拝する世界観の価値を認めた。森里海の循環系の重要性を認めていたのです。

世の中では、日本人だけです。「堤防造れ」、「目の前の復興がうまくいっていればいい」という。まず、「金を儲けること」。それだから、多少自然が痛もうと、水が汚染されようと知ったことではない。こうゆう世界が横行している。

私は、入山料もやっており、この話をしようかと思いましたが、時間もあまりないので、これくらいで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

番号	実施年月	実施場所	テーマ
①	1996年３月	大月市民会館	桂川・相模川流域の交流と連携の序章
②	1996年11月	富士五湖センター	上下流からの発信
③	1998年２月	海老名市文化会館	流域環境保全プログラムの発信
④	1999年３月	相模原市けやき会館	桂川・相模川を美しくするために　～流域のゴミ問題～
⑤	2000年３月	都留市文化会館	桂川・相模川の水をきれいにするために ～石けんと合成洗剤を例として～
⑥	2000年11月	寒川町民センター	～飲み水から桂川・相模川流域を考える～
⑦	2001年11月	相模湖交流センター	相模湖を知ろう・遊ぼう・体験しよう
⑧	2002年12月	大月市民会館	森・川・海との新たな交流・連携 ～市民参加による流域の森づくりと上下流交流の促進～
⑨	2003年11月	横浜情報文化センター	清く豊かに川は流れる「蛇口の向こうの森を考えよう」 ～飲み水はどこからどこへ～
⑩	2004年11月	山梨県郡内地域産業振興センター	富士吉田市、桂川・相模川流域協議会合同シンポジウム 豊かな水の恵みを後世に　－富士から始まる循環型社会－
⑪	2005年11月	サン・エールさがみはら	桂川・相模川の未来を創ろう
⑫	2006年11月	上野原市文化ホール	―桂川・相模川水系－　水源地からの警告 ～誰が私たちの飲み水を守るのか～
⑬	2007年11月	愛川町文化会館	桂川・相模川からのメッセージ　～水質と農薬のかかわり～
⑭	2008年11月	勝山ふれあいセンター	変わりゆく富士山　―桂川・相模川の源―
⑮	2009年11月	神奈川中小企業センター	都会が支える水源林の未来　～流域林の活用～
⑯	2010年９月	相模川三川合流地点	『川は誰のものか』
⑰	2011年11月	忍野村生涯学習センター	いのちをつなごう　～最上流部に暮らすいきものたち～
⑱	2012年11月	相模女子大学	川の声を聞こうよ　桂川～相模川
⑲	2013年10月	山中湖村公民館	富士山から相模湾へ水は巡る　～紅葉の山中湖シンポジウム～